

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 4 月 30 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04379

研究課題名（和文）「いじめ」「ネットいじめ」による排斥が、高次の認知機能や将来展望に及ぼす影響

研究課題名（英文）The Effects of Social Exclusion Due to Bullying and Cyberbullying on High-Order Cognitive Functions and Future Prospects

研究代表者

三島 浩路（MISHIMA, Koji）

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号：90454371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：「いじめ」被害の中に排斥という要素が存在することから、「いじめ」被害における排斥に着目して、被排斥経験が生徒の将来展望を低下させることにより、学校適応が低下するという仮定を設け検討した。その結果、中学生当時の「いじめ」被害が高校入学後の学校適応等に影響する可能性が示唆され、その過程において、将来展望を構成する一つの因子である「向社会的努力志向」が関連する可能性が示された。具体的には、高校入学後の友人適応には、中学生当時の「いじめ」被害が直接影響する可能性と将来展望の低下が介在する可能性の両方が示唆されたが、学習適応に関しては、将来展望の低下が介在する可能性のみが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仲間からの排斥による「いじめ」被害が、生徒の学校適応に負の影響を及ぼす過程に関しては、排斥によって生じた強いストレスや抑鬱傾向の高まりなどの情緒的な要因が介在すると考えられ、そうした情緒的な側面に対する支援が中心だった。しかし、本研究の結果から考えれば、生徒の学校適応を高めるためには、抑鬱傾向を改善するなどの情緒的な側面に対する支援だけでなく、生徒の将来展望を強化する支援も重要となると考えられる。「いじめ」被害を受けた生徒に対する支援の新たな方向性を示唆できた点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine social exclusion as an element of harm caused by bullying and test the hypothesis that school adaptation decreases because the experience of exclusion affects students' future prospects. The results revealed that the harm caused by bullying in junior high school may affect students' school adaptation after entering high school. The results further indicated that this process may be related to prosocial effort orientation, which is a factor that affects future prospects. Specifically, it was suggested that adapting to friends after entering high school may be directly impacted by the harm caused by bullying in junior high school, which may play a mediating role in reducing students' future prospects. However, with respect to learning adaptation, only a decrease in future prospects was demonstrated.

研究分野：社会心理学

キーワード：いじめ被害 排斥 将来展望 生徒 学校適応

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、抑鬱傾向などが媒介して、将来展望や高次の認知機能に対して、仲間からの排斥などがネガティブな影響を与えると考えられてきた。しかし、実験室実験の結果は、抑鬱傾向などのネガティブな情緒的要因が介在せず、将来展望や高次の認知機能の低下に、排斥がネガティブな影響を直接与えることを示唆している。そこで、本研究では、仲間から排斥が、高校生の将来展望に及ぼすネガティブな影響について検証する。さらに、仲間はずれ等の排斥による「いじめ」が原因で、学業不振や将来展望の喪失など、学校適応上の問題を抱えた生徒に対する支援の新たな方向性を示唆したい。

2. 研究の目的

- (1) 仲間等からの排斥による「いじめ」被害が、被害生徒の将来展望や学校適応にネガティブな影響を与えるプロセスを探索する。
- (2) 上記(1)の目的を達成するために、高校生の将来展望を測定する尺度開発を行う。

3. 研究の方法

(1) 高校生用将来展望尺度の開発：2017年11月にクラス単位での質問紙法による調査をA県立B高校(普通科)で行い、生徒537人のデータを分析するなどして高校生用の将来展望尺度を開発した。具体的には、白井(1994)の「時間的展望体験尺度」、尾崎(1999)の将来展望に関する調査項目を参考にして調査項目原案を作成し、現役の高校教師5名に協力を求め、調査項目原案の表現を改めるなどして調査項目を確定した後、調査を行った。なお、将来展望尺度の妥当性を検証するために学校適応感に関する調査も合わせて行った。

(2) 排斥による「いじめ」被害が、将来展望・学校適応に及ぼす影響：A県立C高等学校の1年生281人(男子130人 女子151人)を対象に3期にわたる調査を行い、中学生当時に受けた「いじめ」被害が、高校入学後の将来展望や学校適応等に与える影響について分析した。具体的には Figure1 に示したモデルの検証を共分散構造分析により行った。

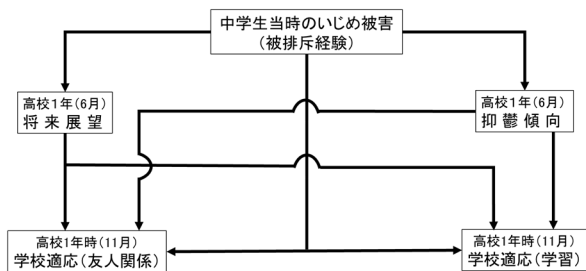


Figure1 本研究で扱う変数間の基本的な関連予想モデル

第1期調査は中学校を卒業した直後の2018年3月、第2期調査は高校入学後の2018年6月、第3期調査は2018年11月に実施した。第1期調査はC高校の入学説明会の折、保護者を対象にして説明と依頼を行い、保護者に調査紙を配布して各家庭で生徒が記入後、厳封した状態でホームルーム担当教員へ提出した。第2・3期調査に関しては、ホームルームの時間を利用して、ホームルーム担当教員が調査紙を配布・回収する方法で実施した。

第1期調査では、中学生当時に受けた「いじめ」被害に関する3項目(v1:中学生のころ、クラスのみならずいじめられたように感じた。v2:中学生のころ、仲間はずれにされたと感じた。v3:中学生のころ、親しい仲間からいじめられたように感じた)に5件法(5:感じた。4:ときどき感じた。3:あまり感じなかった。2:ほとんど感じなかった。1:まったく感じなかった)で回答する形式の調査を行った。これら3項目のすべてについて「2」以下を回答した生徒を「無被害」群、1項目以上に「3」と回答した生徒を「弱被害」群、1項目以上に「4」以上を回答した生徒を「被害」群とした。

第2期調査では、事前に開発した高校生用将来展望尺度の15項目による調査を行った。さらに、第2期調査では、生徒の抑鬱傾向を測定するために、簡易抑うつ症状尺度(QIDS:藤澤・中川・田島 他, 2010)16項目のうち、高校側から調査の承認が得られた7項目を利用した。

第3期調査では、生徒の学習・友人適応を調査した。学習面における適応状況、友人関係に関する適応状況を把握するための調査項目を、高校生活適応感尺度(浅川・森井・古川・上地, 2002)を参考にして高校教師5名の協力を得て作成し、学習適応(4項目)・対人適応(4項目)に関する調査を行った。

4. 研究成果

(1) 中学生当時の「いじめ」被害による3群化

中学生当時の「いじめ」被害を測定した3項目の測定値を、「無被害」「弱被害」「被害」の3群で比較した結果、3項目すべてについて3群間に有意な違いがみられた($p < .001$)。多重比較(TukeyのHSD)を行った結果、3項目すべてについて3群の平均値に有意な違いがみられたことから($p < .001$)、「無被害」「弱被害」「被害」という3群化は、特定の項目の回答結果だけでなく3項目すべての回答結果を反映したものであり、本研究で測定した「いじめ」被害の程度を反映したものと考えられる。

(2) 将来展望・抑鬱傾向・学校適応に関する因子分析

事前に開発した高校生用将来展望尺度の15項目を改めて因子分析(最尤法・プロマックス回転)した。固有値の推移(5.47 2.51 1.21 0.87 ...) 解釈可能性の高さから3因子解を候補とした。それぞれの因子に対して大きな因子負荷量($> .40$)を示す項目を観測変数とした

モデルを作成して確認的因子分析を行った結果(GFI=.95, AGFI=.91, CFI=.97, RMSEA=.051, SRMR=.043)、データに対するモデルの当てはまりは許容できるものであり、3因子解を採用した。「人の役に立つような生き方がしたい」「勉強や部活動などで“苦しい”と感じてもがんばることは、自分の将来に役立つと思う」などの6項目が第1因子に大きな負荷量を示したことから「向社会的努力志向」因子と第1因子を解釈した。「私には、将来の目標がある」「高校や大学を卒業した後の就職先など、自分がやりたいことは決まっている」などの4項目が第2因子に大きな負荷量を示したことから「将来イメージ・目標の明確さ」因子と第2因子を解釈した。「3年後の自分は、今以上に充実した生活をしている」「私の将来には、希望もてる」など3項目が第3因子に大きな負荷量を示したことから「肯定的・積極的将来像」因子と第3因子を解釈した。

抑鬱傾向を測定する7項目の因子分析(最尤法)を行った。固有値の推移(2.52 1.07 0.89 ...) 解釈可能性の高さから1因子解を採用した。「食欲がない」「自分の好きな遊びや活動に対する興味や意欲が減退している」の2項目を除いた5項目が大きな因子負荷量(>.40)を示し、これら5項目を観測変数としたモデルを作成して確認的因子分析を行った結果(GFI=1.00, AGFI=1.00, CFI=.1.00, RMSEA=.000, SRMR=.009)、データに対するモデルの当てはまりは良好であり、抑鬱傾向をこの5項目で測定することとした。

学習・友人適応に関する8項目の因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。固有値の推移(2.52 1.49 1.02 0.86 ...) 解釈可能性の高さから2因子解を候補とした。それぞれの因子に対して大きな因子負荷量(>.40)を示す項目を観測変数としたモデルを作成して確認的因子分析を行った結果(GFI=.98, AGFI=.95, CFI=.97, RMSEA=.062, SRMR=.045)、データに対するモデルの当てはまりは比較的良好であり、2因子解を採用した。「困ったことがあったら、友だちに相談する」「友だちには、自分の秘密など何でも話すことができる」などの3項目が第1因子に大きな負荷量を示したことから「友人適応」因子と第1因子を解釈した。「最近約2ヶ月間の学校における学習活動」「授業中、先生の話をよく聞いている」などの3項目が第2因子に大きな負荷量を示したことから「学習適応」因子と第2因子を解釈した。

(3) 「いじめ」被害群間の将来展望・抑鬱傾向・学校適応の違い

「いじめ」被害3群を独立変数、将来展望に関する3つの因子を構成するそれぞれの項目を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果、「向社会的努力志向」因子と「肯定的・積極的将来像」因子に有意なちがいがみられた。「無被害」群に比べて「被害」群の平均値が小さいことから、「いじめ」被害を中学生当時に受けた生徒は、そうした被害を受けていない生徒に比べて、高校入学後の将来展望の中でも「向社会的努力志向」が弱く、「肯定的・積極的将来像」が不明確であることが示唆された。

抑鬱傾向に関する5項目を従属変数とした多変量分散分析を行った結果、有意なちがいがみられた。「無被害」群に比べて「被害」群の平均値が大きいため、「いじめ」被害を中学生当時に受けた生徒は、そうした被害を受けていない生徒に比べて、高校入学後の抑鬱傾向が強いことが示唆された。

学校適応に関する2つの因子を構成するそれぞれの項目を従属変数とした多変量分散分析を行った結果、「友人適応」因子と「学習適応」因子の両方に有意なちがいがみられた。「無被害」群に比べて「被害」群の平均値が小さいことから、「いじめ」被害を中学生当時に受けた生徒は、そうした被害を受けていない生徒に比べて、高校入学後の友人・学習に関する適応が低いことが示唆された。

(4) 「いじめ」被害と将来展望・抑鬱傾向・学校適応の関連

中学生当時の「いじめ」被害が、6月に測定した将来展望の「向社会的努力志向」因子・「肯定的・積極的将来像」因子・抑鬱傾向

と関連し、11月に測定した「友人適応」因子や「学習適応」因子とも関連することを示唆する結果が得られた。そこで、これらの因子等を、Figure1 に示した関連予測をもとにしてモデル化し、共分散構造分析を行った。パス係数が小さく、有意な水準にないパスを削除したところ Figure2 に示す結果が得られた。このモデルのデータに対する当てはまりは概ね許容できるものであったので(GFI=.89, AGFI=.86, CFI=.90, RMSEA=.058, SRMR=.067)、このモデルをもとにして、変数間の関連を検討する。

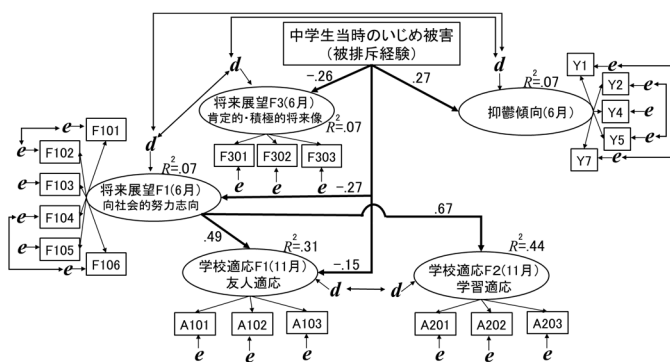


Figure2 共分散構造分析の結果

中学生当時の「いじめ」被害は、高校入学後の抑鬱傾向の強さや将来展望を構成する一つの因子である「肯定的・積極的将来像」に関連するが、6月時点における抑鬱傾向や「肯定的・積極的将来像」は、11月時点における学校適応に関連しない。一方、中学生当時の「いじめ」被害が関連する6月時点での「向社会的努力志向」は、友人適応と学習適応の双方に関連することが示唆された。(ブートストラップ法による標準誤差の推定を用いて間接効果の検定を行った。その結果、中学生当時の「いじめ」被害と「友人適応」因子の間接効果標準化推定値: -.13, p<.01.

中学生当時の「いじめ」被害と「学習適応」因子の間接効果標準化推定値：-.18, $p < .01$)。こうした結果が得られたことから、中学生当時の「いじめ」被害が、生徒の将来展望を構成する因子の一つである「向社会的努力志向」を介して、高校入学後の学校適応に影響する可能性があることが示唆された。

(5) 分析結果に関する考察

「いじめ」被害の中に排斥という要素が存在することから、「いじめ」被害における排斥という側面に着目して、排斥に関する実験室実験等の先行研究をもとにして、被排斥経験が生徒の将来展望を低下させることにより、学校適応が低下するという仮定を設け検討した。

その結果、中学生当時の「いじめ」被害が高校入学後の学校適応等に影響する可能性が示唆され、その過程において、将来展望を構成する一つの因子である「向社会的努力志向」が関連する可能性が示された。本研究で用いた方法では、「いじめ」被害と学校適応等との因果関係を検証することはできない。そのため、結果の解釈は慎重に行う必要がある。本研究の結果から、高校入学後の友人適応には、中学生当時の「いじめ」被害が直接影響する可能性と将来展望の低下が介在する可能性の両方が考えられる。一方、学習適応に関しては、中学生当時の「いじめ」被害が直接影響する可能性は低く、将来展望の低下が仲介する可能性が大きい。

仲間からの排斥が適応や学力に影響する過程で、排斥によって生じたストレスが介在することを DeRosier, Kupersmidt, & Patterson(1994) が指摘しているように、「いじめ」被害者に対する支援としては、被害を被ることにより生じた強いストレスや抑鬱傾向への対応など情緒的な側面に対する支援が中心である (e.g., 山崎・高木・樋口・樫原・中川・下山, 2015)。しかし、本研究の結果から考えれば、生徒の学校適応を高めるために、抑鬱傾向を改善するなどの情緒的な側面に対する支援だけでなく、生徒の将来展望を強化する支援も重要となる。

Sigurdson, Wallander, & Sund(2014)は10年以上の長期間に及ぶ調査の結果から、「いじめ」被害が教育を受けることへの願望の低下に関連するために、「いじめ」被害者の最終学齢(大学等への進学率)が低いことを報告している。ここでいう“教育を受けることへの願望の低下”を生じさせる原因として、生徒の将来展望の低下が関連している可能性がある。一方、Feldman, Ojanen, Gesten, Smith-Schrandt, Brannick, Totura, Alexander, Scanga, & Brown(2014)による5年間の長期的な調査の結果からは、「いじめ」被害と学業成績(GPA)との間に関連がみいだされていない。今後、因果関係を明確に示すことができる調査・分析方法を採用し、「いじめ」被害と学習適応や学業成績との関連について、将来展望の強さが媒介するのかどうかを明確にする必要がある。

今回の調査では、高校進学というイベントにより中学生当時の「いじめ」被害者・加害者の関連が消失したと想定している。しかし、実際にそうした関係が消失したのかどうかは明らかでない。さらに、中学生当時、「いじめ」被害を受けた生徒が、高校入学後、新たな「いじめ」の被害者となっただけではなかったのかどうかを調査する必要もある。高校入学後の「いじめ」被害に関する調査の結果により生徒を分類し、中学生当時は「いじめ」被害を受けていたが、高校入学後には「いじめ」被害を受けていない生徒を抽出するなどの方法を採用することが、「いじめ」被害の長期的な影響をより正確に把握するためには必要である。

また、「いじめ」と抑鬱との因果関係についても、抑鬱傾向の強い子どもは「いじめ」被害を受けやすいという報告(Fekkes, Pijper, Fredriks, Vogels, & Verloove-Vanhorick, 2006)もあることから、抑鬱傾向の強い生徒が高校入学後、中学生当時とは別の「いじめ」の被害者となり、その「いじめ」の影響を受けている可能性も否定できない。さらに、「いじめ」被害を受けても、学力の高い生徒は抑鬱傾向を示す可能性が低いことを示唆する報告(Hemphill, Tollit, & Herrenkohl, 2014)もあることから、「いじめ」被害が抑鬱傾向や学習適応に及ぼす影響については、双方向的な因果関係を想定したモデルの構築・検証も必要である。

文 献

- 浅川潔司・森井洋子・古川雅文・上地安昭 (2002). 高校生の学校生活適応感に関する研究 - 高校生活適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 22, 37-40.
- DeRosier, M. E., Kupersmidt, J. B., & Patterson, C. J. (1994). Children's academic and behavioral adjustment as a function of the chronicity and proximity of peer rejection. *Child Development*, 65, 1799-1813.
- Fekkes, M., Pijper, F., Fredriks, M., Vogels, T., & Verloove-Vanhorick, P. (2006). Do bullied children get ill, or do ill children get bullied? A prospective cohort study on the relationship between bullying and health-related symptoms. *Pediatrics*, 117, 1568-1574.
- Feldman, M. A., Ojanen, T., Gesten, E. L., Smith-Schrandt, H., Brannick, M., Totura, C. M. W., Alexander, L., Scanga, D., & Brown, K. (2014). The effects of middle school bullying and victimization on adjustment through high school: Growth modeling of achievement, school attendance, and disciplinary trajectories. *Psychology in the schools*, 51, 1046-1062.
- 藤澤大介・中川敦夫・田島美幸・佐渡充洋・菊池俊暁・射場麻帆・渡辺義信・山口洋介・舩末克代・衛藤理沙・花岡素美・吉村公雄・大野 裕 (2010). 日本語版自己記入式簡易抑うつ尺

- 度(日本語版 QIDS-SR)の開発 ストレス科学, 25(1), 43-52.
- Hemphill, S. A., Tollit, M., & Herrenkohl, T. I. (2014). Protective factors against the impact of school bullying perpetration and victimization on young adult externalizing and internalizing problems. *Journal of School Violence*, 13, 125-145.
- 尾崎仁美 (1999). 青年の将来展望研究に関する一考察 - 将来次元の重要性を考慮する意義 大阪大学教育学年報, 4, 87-100.
- Sigurdson, J. F., Wallander, J., & Sund, A. M. (2014). Is involvement in school bullying associated with general health and psychosocial adjustment outcomes in adulthood? *Child Abuse & Neglect*, 38, 1607-1617.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 山崎久慶・高木郁彦・樋口紫音・榎原 潤・中川実耶・下山晴彦 (2015). いじめ問題への取り組みにおけるスクールカウンセラーの役割：多職種協働の観点から 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 38, 19-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三島 浩路	4. 巻 13
2. 論文標題 高校生用 将来展望尺度の開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要（中部大学）	6. 最初と最後の頁 29 - 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 中学生当時のいじめ被害と高校入学後の学校適応の関連－高校入学後の将来展望の影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 中学生当時のいじめ被害が高校生の将来展望に及ぼす影響(1) 入学前・入学後調査結果による検討
3. 学会等名 日本応用心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 中学生当時のいじめ被害が高校生の将来展望に及ぼす影響(2) 入学前・入学後調査結果による検討
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 将来展望とライフイベント・自己意識との関連 - 公的自己意識・私的自己意識に着目して
3. 学会等名 日本応用心理学会第85回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 高校生の将来展望と学校適応 - 将来展望尺度の開発・利用 -
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三島 浩路
2. 発表標題 「いじめ」による仲間からの排斥が将来展望に及ぼす影響 - 高校生を対象とした調査から
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------